

演劇づくりは、 心の「Beyond Borders」。

日本のコミュニケーション教育をけん引する平田オリザ氏が取り組む独自の演劇教育では、異なる背景を持つ生徒たちが出会い、グループを作り、手探りでコミュニケーションを取りつつ、ゴールである本番に向かって演劇を創ります。2016年8月8〜10日、立命館大学大阪いばらきキャンパスが、その舞台になりました。出会ったのは、立命館高等学校、灘中学校・高等学校、追手門学院高校の3校。彼らは、どのように違いを受け入れ、協働し、チームとなっていたのか？ 演劇教室の様子をレポートするとともに、終了後の生徒の座談会を再現します。



平田オリザ氏
劇作家・演出家
青年団主宰

ゴール(発表)を目指す
プロセスからの
「気づき」が重要なんです

レッスンの流れ

※具体的なワークやオリザ氏のレクチャーについては、「RITA」vol.2で書いていただきます。

1日目

ポディワークを通して、
多様性と協働の喜びを体感する。

午前10時スタート。生徒たちは、平田オリザ氏のワークショップへの参加経験の有無によって、2つのチームに分けられました。

初参加の生徒たちが受けたのは、1日講座などもオリザ氏が提供している、ポディワークを中心としたプログラム。2人1組で背中合わせになり、背中で動きを伝えたり、手

を使わずに立ち上がることで協働のポイントを体感するワークや、即興で演じることで、演劇づくりでも重要な「イメージの共有」を実感するワークを体験しました。

一方、参加経験のある生徒たちのグループには、オリザ氏から渡されたシナリオをもとに、配役や演出を考えて練習し、昼食前に発表しました。初対面もしくは昨年12月実施の演劇教室以来の顔合わせとなるメンバーもいる中、わずか2時間足らずの間に配役を決め、演出していくコミュニケーションに驚かされます。午後からはいよいよ、本編の演劇づくり。生徒たちは、オリザ氏の著



身をゆだねることでラポール(信頼関係)を築くワーク。

書「演劇入門」を読んでそれぞれ考えてきた演劇のアイデアを、「場所・背景・問題」に分けて整理して書いて

2日目

合意の難しさと
産みの苦しみを味わう。

1日目に作成したプロットとシナリオをもとに、実際に台詞を口に出したり、動きをなぞってみて、自然なところやおもしろいところなど、演出に手を加えていきます。とはいえ、1日目でシナリオ完成まで行けなかったグループも多く、時間の経過とともに、生徒たちの表情には「本当に明日、発表できるのか？」という不安がちらついてきます。

「自分の意見を通すべきなのか？」「納得感はないけれど、スムーズに進めるためにみんなに合わせた方がいいのか？」「あの人は人の話を聞かずにひとりしゃべっている…」「何とかいい雰囲気を進めたい…」生徒それぞれが心の中に葛藤を抱えながら、発表というゴールに向かって各グループとも真剣に演劇づくりに取り組みました。

終了は18時30分。生徒たちは本番への不安を打ち消すように、引き続き、すべてのグループが自主的に集まって練習したり、話し合いを続けました。通して練習し、演技のチェックを行うグループがある中で、まだシナリオが確定しないグループもありました。

3日目

「お互いを認め合う」
空気が生まれる。

朝8時過ぎ。10時のレッスン開始に先駆け、「朝練」のために各グループが集まり始めました。2日目の夜の時点で、まだ落とすところが見えていなかったグループも、何とか筋が見え、突貫で演出と演技練習を進めています。

必死にリハーサルを重ねる生徒たちを見て、オリザ氏は発表開始を遅らせ、11時から各グループによる発表がスタート。生徒による熱演の後、オリザ氏による講評と、引率教員による投票を実施。各グループとも心残りはあるものの、メンバーそれぞれが力を出し合っており、最後にはグループは「チーム」に進化しました。グループで話しながらアンケートに記入し、名残を惜しみながらの解散となりました。



3日間の「プロジェクト」を終え、
違いを受け入れ、
違いを生かすことを学びました



意見を聞くこと、 周りを見ることから、 生まれるもの。

状況に合わせて柔軟に動ける人が、
求められている。

金井 今回の演劇教室のプロセスから、何か感じたことはありませんか？

寺島 私は演劇部で、何回か平田先生以外の演劇ワークショップを受けたことがありましたが、呼吸とか動きの練習が中心で、今回のように、演出家はどう思っているとか、俳優がどう動いたらもっとよく見えるとか、そういう視点をもらえたのは初めてでした。そのまま活かせると思っただのが、プレゼン能力の話。私はSGH(スーパーグローバルハイスクール)のクラスにいて、海外の人にプレゼンする機会があるのですが、相



寺島 なつき
立命館高校
3年生

手はどう感じるかという意識したことがなかった



青木 吉弘
灘高校 1年生

んです。演劇とプレゼンって、共通するなあと思っ

リーダーもフォロワーも、状況に合わせて柔軟に動ける人が求められていると実感しました。小学校の頃から、グループで話し合うときは司会を1人決めて進めるようになって言われてきたけど、その時々で司会も変わっていてもいいんじゃないかなって。グループのメンバーや状況に合わせて対応できる人になれたらと思います。

青木 吉 演劇教育から生まれるものについて、平田さんの本を読んで理解していたつもりでしたが、実際にレッスンを受けてみて、3つの高校という異なる文化の人間がコンテキストを埋めていくことの難しさに気づきました。平田さんが、「大学入

ファシリテーター



金井 文宏
稲盛経営哲学研究センター
客員教授



かな。

金井 立命館のスローガンに「Beyond Borders」というのがあるんですが、垣根を超えて混ざることが大事なんですね。

「聞くこと」と「引くこと」、
「合わせること」で完成度は高まる。

于 私もSGHのクラスにいて、海外の生徒と接することが多いのですが、彼らと話す内容と、教室で友だちと話す内容がかけ離れていて、海外の生徒の方が逆に話しやすいこともありま

す。ふだん日本語を話すのとは、別の頭で話せるからかな？ ディスカッションやディベートなど、自分の意見を主張できるのがいい。クラスでは話すときは、女子同士で話を合わせることが多い。

今回はその真ん中かな？ 演劇とコミュニケーションの共通項って「対話」だと思っ

ますよ。だから、今回のように知らない人同士と一緒にやる場合、「聞くこと」で話しやすい雰囲気をつくれる。だから、できるだけみんなの話を聞くようにしていいかな。もっとも、私たちのグループは主張が強すぎて、收拾がつかなくなっちゃいましたけど。

金井 主張が強い海外の人パターンのグループになっちゃったんですね。



于 愛佳
立命館高校
2年生

于 いろんな意見が出てきて、登場人物が

わって、アイデアが分散していった。でも3日目の朝、バラバラの意見が重なって、一つの話として完成して、ほっとしました。「聞くこと」も大事だけど、時間を置いて一旦引いて見ることで、つながりがわかってくるんだなと思いました。

青木 大 僕は于さんと同じグループだったのですが、于さんはカオスを何とかしようとして頑張っていたけど、僕は疲れてしまって、途中からほとんどしゃべらず、まったく貢献できなかった。

金井 自己主張ばかりの中で折れてしまったの？

于 そうそう。だから、青木くんが折れているなあ気づいたら、「どう思う？」って話しかけるようにしていました。

金井 それで、出来上がった作品には納得できた？

青木 大 まさか完成するとは思っていませんでした。場を、乱しているように見えた人が、最後にがんばって徹夜してセリフとか完成させたりしてて…。一人でやった方が



河崎 正太郎
追手門学院高校
表現コミュニケーションコース
3年生

広げていく、聞き手にまわる貢献の方法もあるなあと。それ



から、会ったばかりの人とも、思いついたアイデアを口に出せる、柔らかに話して話しやすい空気を作れるというのも、大事なことだと思った。今回できてなかったけど。

金井 今ふり返ると、その時どうすればよかったと思う？

河崎 いきなり作品の構成について話し始めるのではなくて、最初は肩

の力を抜くくらい感覚でもっとフランクに始めれば、固執しないで視野を広げられたんじゃないかと。

金井 3日間一緒に演劇を創って、やわらかい雰囲気になった？

河崎 互いを活かして、互いを自分の中に混ぜるといった感覚はつかめた

た。実際、話し合いはスムーズに進みませんでした。お互いが出過ぎたり、誰もしゃべらなかつたり。そんな中、アイデアを出し続けることだけが、チームへの貢献ではないんだと気づきました。メンバーの話

いいこともある。でも他の人との意見を取り入れることで、一人では見えなかったことも見えてくる、そのバランスが難しい。

于 自分の考えだけで突っ切るのは簡単だけど、みんなの意見を合わせることで完成度はさらに上げられるかもしれない。その過程を体験することが、今回のプログラムで大切なんじゃないかと思ったんです。いろんな視点を整理できたときに、いい結果が生まれる。

青木大 最初は時間の無駄に見えた議論が、後から生きてくる可能性があるあるんですね。

違いを受け入れ、個性を活かす。時にはぶつかり合うことも大事。

和田 カラーの違う学校が3つ揃って、意見がぶつかったり合わなかったりが、すごくおもしろかったんです。私は「ぶつかり合う」っていいなって思っているんです。全員が同じ意見でもつまんないじゃないですか。

最初、オリザさんのワークショップ経験者だけで演劇をつくった時、河崎くんや私



青木大将
灘高校1年生

は「とりあえずやってみよう!」やりながら

言うこと。そして、相手にも考えがあるから、それを話し合って理解しようとするんだと思う。ただそこにいるだけでは何もわからない。

金井 それはディベートでやりあうというのとちょっと違う感じ?

于 ディベートは勝ち負けがついて、どちらかの意見に変えないといけない。今回は、二つの意見を合わせて違う意見をつくっていく感じ。意見を共有して一緒につくるっていう過程で、演劇以外の部分も普通に話せるようになりました。

金井 ディベートと「対話」の違いに気がついたんですね。そういう時に大事なことは我慢すること?



和田奈那美
追手門学院高校
表現コミュニケーションコース
3年生

つくって「こう!」と言って「いたんですが、灘校の人は冷静にオ

リザさんの手法を分析して。その時、ハッとしました。自分のやり方だけで進めようとしてたな、と。**青木吉** お互いのやり方を取り入れたのがよかったと思う。どちらかに偏る必要はないんだと思います。

和田 今回の演劇教室もそうですけど、コミュニケーション力って、社会的で誰とでもしゃべれるということではなくて、受信と発信がうまくできることじゃないかなって思うんです。相手の話を聞いて、その上で自分がどう返していくかとか、その人をどう生かしていけるかと考えるのが大事なのかな。

青木大 僕の場合は、本にはどう書いてあるかとか、周りの人の意見を集めるのが得意。でもそれって、自分の意見に自信がないということでもある。僕から見ると、自分の意見を通せる人はすごいと思う。どっちの方が優れているとかはありませ

于 立命館高校は、協調しよう、積

河崎 相手の意見を聞いた上で、何が最も適切かを判断することが大事。我慢するのは違うんじゃないかな。

金井 なるほど。ふだんからそういう生活態度なの? それとも演劇をつくる時にそういう態度になる?

河崎 ふだんから心がけてはい

寺島 オリザさんから「個性をどう生かすか」という視点をもらって、空気が変わりましたね。ガールズトークを取り入れようとか。

レットテルで判断するのではなく、一人ひとりを考えることが大切。

青木吉 立命館だから、追手門だから、灘だからって、「レットテルを貼る」じゃないですけど、全体で見るんじゃないって、個別の事象ごとに当てはめていくっていうのは重要だなって感じました。

河崎 違う文化の人とどうやって関係を築いていくか、一人ひとり個別で見るこの大切さなど、これから物事を考えていくうえで大切な要素、アイテムを手に入れた感覚はあります。

青木吉 こういうところで手に入れたものが、自分のペースの中に入っていくって、意識しないうちに生かさ

極的にみんなでもとまろうという思いが強いですね。

河崎 組体操的な感じですね。うち(追手門学院高校)は100m走的な(笑)。

寺島 確かに! 立命館の演劇部では、主役を立てずに、みんなそれぞれ問題を抱え込んでいて、それが集まった時に:

和田 灘校の人は考えるのは得意だけど、演じるとなると抵抗

があるみたい。それをムリやり演技をしろって言うんじゃないかって、どうしたらおもしろいか考えようと思いました。それで一度、「おどおどして」って言ったら、すごくはまって。素だからおもしろい。クスって笑え

れていくっていうの、いいな。**河崎** 無意識のうちにか生かされる、日常生活のどこかで生きている。自分の中に組み込まれているよ

和田 私にはいつも感性がぶつかる友達がいるんですけど、最近、私を気遣って意見を通してくれるようになってしまっ。それって、私はすごく怖いことだっ。思うんです。反対意見がないから、一人よがりになっ

てしまっ。こうやってぶつかることが大事だったんだなって、今回、気づきました。

RITLABO 総括

平田オリザ氏は「わかりあえないことから」(講談社現代新書) スタートする方がよいとしています。

「利他」は、わかりあえていない二人の、強者の方から弱者への、押しつけになることもあります。また、強者の「利他」という正義に合わせて、弱者が演じることにより、利益を引き出すこともあります。

「利他」という実践の前に、まずお互いのコミュニケーション回路を

ちやう。おいしいキャラですよね。**金井** なるほど。演出家、として、そういうキャラで使えると思ったわけね。**河崎** 演劇に限らず、みんなで作品をつくるというのは、自分の考えを

金井 ぶつかるっていいことなんだなって再確認した?

和田 むしろ恋しくなりました(笑)**寺島** 例えば、同じ部活の人だけで固まっていると近寄りたくて、「〇〇部の人」って見てしまっけど、一人ひとりだと話しやすかったり、それぞれ違いがあるんですね。海外の学生が来るイベントでも、海外生とひと塊で見ると、将来的にどこか海外で会っても、「あの時は!」と言えるような友達とか人間関係を一人ひとりにつくっていったらいいなと思っています。

開く必要があり、演劇づくりはその回路を開く可能性を持っていると感じています。実際、多文化共生社会であるオーストラリアやカナダでは、学校教育に演劇が取り入れられています。

参加生徒による座談会での発言から、生徒たちは、演劇づくりを通して、文化の異なる人とのコミュニケーションや合意形成のポイントなど、多くの気づきを得てくれたことが明らかになり、実施の目的は概ね達成できたと考えています。(金井文宏)



真剣なまなざしで生徒たちの演劇を見守るオリザ氏。



本番は、立命館大学大阪いばらきキャンパスフューチャープラザのオープンスペースで実施。見学に加わる市民の方も。